

「身体をくぐらせる体験を通して学ぶいのちの教育『生と死の教育』」

大阪府東大阪市立長栄中学校 非常勤嘱託

やましたふみ お
山下文夫

最近、「いのちの教育」という語句を見るだけで「ん？」と反応してしまう時期ではないでしょうか？

1980年代後半、エイズが大流行の兆しを見せた時、日本では厚生省が次々とパンフレットを出し、教育委員会は冊子をまとめ、研修会を開いて動員をかけました。マスコミも連日のようにエイズについて報道し、新聞記事の中にエイズの字を見ない日が無いほどでした。

今、エイズはどうなっているのでしょうか？ 今日でもエイズ患者は増えつづけ、とくに若い層に増加していると言われています。しかし今、世論にはあの時の勢いはありません。まるで打ち上げ花火の後のように。

私は、「いのちの教育」は打ち上げ花火にしてはいけないと思うのです。いじめが下火になり自殺が減少してくるとどうなるのでしょうか？

私たち教育に関係する者は、いつの時代も、土に足をつけて常に「ぶれないもの」を、大事にしていかなければならないと思うのです。教育は100年の計と言われる所以はまさにここにあるのでしょうか。

「生と死の教育」は、「人間、いかに生きるか」と共に考えることです。

フランスの教育と比較して「日本の教育には哲学がない」と指摘する人がいました。しかし、子供たちは「こんな授業を受けたかった」「本当に授業らしい授業を聴いた」と言います。子供たちはこんな授業を求めているのです。

「生きているだけで価値がある」とか「生きているだけで親孝行」と言うフレーズに強く反応します。子供たちは「オレ、がんばるわ」と言うのです。ここに教育の原点があるのではないのでしょうか？